宇治十帖の方法

――薫と大君の恋物語をめぐって――

金　静　熙

八の宮がその死を前に薫に託した遺言には、遺される娘たち大君と中の君に対する後見の依頼が示されていたが、やがて大君に恋情を募らせてゆく薫と彼を拒む大君それぞれにとって、その遺戒が如何なる意味を有していたかがこの恋物語における一つの論点になっている。[1] また、薫と大君の結婚の不成立をめぐっては、罪の子という出生の秘密を持ち、道心を抱く薫と、家の零落によって宇治への隠棲を余儀なくされた八の宮の強い影響が指摘される大君であるだけに、物語においてこれまでに見られなかった男女関係が紡ぎ出されていることが、その人物造型を中心に論じられてきた。しかしこの薫と大君の恋物語は、単にその人物の特異性に注目するだけでは、充分に把握することができない。大君の死によって結末が付けられるまでのこの物語の展開は、まず、八の宮と薫の関わりから始まり、そこから次第に中の君や匂宮までを巻き込む形になり、そのことによって薫と大君のあり方が鮮明になってくるのである。本稿では薫と大君の錯綜する関係を、他の人物たちを含みつつ物語が如何に描き出しているのかを明らかにしたい。

一

八の宮が「法の友」である薫に、唯一の心残りである姫君たちのことを託したのは、自分の余命いくばくもないことを予感した時であった。その後、八の宮は姫君たちに次のような遺戒を残している。

（一）世のこととして、つひの別れをのがれぬわざなめれど、思ひ慰まん方ありてこそ、悲しさをもさますものなめ

れ。また①見ゆづる人もなく、心細げなる御ありさまどもをうち棄ててむがいみじきこと。……わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。②おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。

（椎本⑤一八四～五）

ここで注目したいのは傍線部①の表現で、すでに薫に姫君たちの世話を頼んでおきながら、八の宮は姫君たちに「見ゆづる人もなく」と語っている。「見ゆづる」（「ゆづる」、「思ひゆづる」）の語は、源氏物語の中で親が他人に子供を託す文脈において用いられる場合、結婚の許可、または親代わりとしての委託の意を示している。例えば、六条御息所が娘斎宮の女御の後見を源氏に頼み、その胸中を語る行文「まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ」（澪標②三一一）や、一条御息所が自分と落葉の宮の結婚を許した事情を、夕霧が花散里に話す部分「故御息所は、いと心強うあるまじきさまに言ひ放ちたまうしかど、限りのさまに御心地の弱りけるに、また見譲るべき人のなきや悲しかりけむ」（夕霧④四六九）などの用例を見れば、その意味は明らかである。[2] これらの例と傍線部①とを照らし合わせてみれば、八の宮と薫の間で結婚の約束が交わされている、もしくは親代わりとして姫君の処遇のすべてを薫に託しているとは言いがたい。[3] このように姫君たちに対する八の宮の諫めにおいて薫の存在が言及されていないのは、八の宮と薫が互いを仏道者と認め合う「法の友」という関係だからであると思われる。[4] 宮は、「宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなる」（椎本⑤一七一～二）と、薫を婿にしたいと願っているにもかかわらず、「年若く、世の中思ふにかなひ、何ごとも飽かぬことはあらじとおぼゆる身のほどに、さ、はた、後の世をさへたどり知りたまふらんがありがたさ」（橋姫⑤一三一～二）と、零落して仏道に入った自分の場合と比べれば、栄華のただ中での薫の道心は、その実体より理想的に捉えられ、結婚を言い出すことができない。[5] それゆえに、薫に対する八の宮の委託には「さすがに、行く末遠き人は、落ちあぶれてさすらへんこと、これのみこそ、げに世を離れん際の絆なりけれ」（同⑤一五八～九）、「亡からむ後、この君たちをさるべきもののたよりにもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ」（椎本⑤一七九）とあるように、「見ゆづる」の語などなく、その内容は具体性を

欠いている。[6] そして姫君たちを託された薫も、「わざとの御後見だち、はかばかしき筋にはべらずとも、うとうとしからず思しめされんとなん思ひたまふる。しばしもながらへはべらん命のほどは、一言も、かくうち出できこえさせてむさまを違へはべるまじくなん」（橋姫⑤一五九）、「世の中に心をとどめじとはぶきはべる身にて、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なさになむはべれど、さる方にてもめぐらひはべらむ限りは、変らぬ心ざしを御覧じ知らせんとなむ思ひたまふる」（椎本⑤一七九）と道心を標榜しつつ、経済的・精神的な拠り所としての後見役を受け止める消極的な反応を見せている。薫にしてみれば、八の宮が婚姻の許しを明確に言及していない以上、彼から先にそれを語るわけにはいかず、宮と同様に「法の友」の関係に徹するほかない。それゆえに、その遺戒も承諾も曖昧な形になるしかないのだが、注意すべきは、ここで述べられている薫の道心に決して偽りはないことである。

薫は自分の出生に関する秘密を弁から聞き、「我は浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かは」（橋姫⑤一四九）と存在の不安を覚え、大君に近付き贈答歌を交わす。この時の大君の歌（「さしかへる宇治の川長朝夕のしづくや袖をくたしはつらん」）には、「身さへ浮きて」という語が添えられており、両者において共通する「浮く」の表現から推測されるように、薫は自分と同様に存在の不安を感じている大君に「心とまりぬ」と、思いを寄せてゆく（同⑤一五〇）。がしかし、物語はこのように芽生え始めた薫の恋心をそのまま噴出させず、「をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり」（同⑤一五五）と、弁から出生の秘密にまつわる話を聞いて、むしろ一層道心を深めてゆく薫の姿を綴っている。ここには、橋姫巻・椎本巻の展開において薫の出生の秘密の問題が織り込まれている理由が明確に表れているというべきであろう。以下の物語の展開を考慮すれば、八の宮が存命の間は薫と大君の結び付きが確実なものになってはならない。それゆえに、物語は宮の死後本格化してゆく薫の大君への恋の布石を打ちつつ、薫の道心が薄れないように、老女房弁によって彼の出生の秘密が明かされる場面を用意しているにほかなるまい。つまり、薫の道心を保持させている出生の問題は、八の宮の後見の依頼と薫の受諾をあくまで「法の友」という関係のなかで成立させるべく組み込まれたものであることが明らかにされるのである。

＊

以上の八の宮と薫の関係に留意しながら、姫君たちが父

親によって薫との合奏の場に引き込まれ、薫の恋心が高揚してゆくまでの経緯に注目したい。

八の宮を介さず、薫が初めて姫君たちに接したのは、宮の不在中に姫君たちの合奏の音に誘われ、その姿をかいま見た時であった。その直後に再び宇治を訪問した薫は、偶然聞いた姫君たちの楽器の合奏について八の宮に語りながら、琴の演奏を求める。その要請に応じて琴を奏でるうちに八の宮は、「掻き鳴らしたまへ」（橋姫⑤一五八）と、姫君たちに箏の琴の演奏を促す。これと同じ構造のもう一つの楽器の演奏の場面は椎本巻において再現される。姫君たちの将来に対する不安から八の宮が「女は限りありて、言ふかひなき方に思ひ棄つべきにも、なほいと心苦しかるべき」と、娘を持つ親の心情を口にしたことばは一般論でありながら、薫は「おほかたのことにつけてのたまへる、いかがさ思さざらむ」と、父親としての八の宮の心中を思い遣っている。そして、音楽への愛着を捨て切れないと語りつつ、薫が「飽かず一声聞きし御琴の音を切にゆかしがりたまへば」、八の宮は「うとうとしからぬはじめに」と考え、姫君たちを「切にそそのかし」、再び箏の琴を奏でさせている（椎本⑤一八〇～一）。しかしながら、「下人にても、都の方より参り立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず。おほかた、かくて女たちおはしますことをば隠させたまひ、なべての人に知らせたてまつらじと思しのたまはするなり」（橋姫⑤一三八）という宿直人のことばによって明かされているように、普段八の宮は、都から人が訪ねてきた時、姫君たちの存在を知らせまいと、楽器の演奏を厳しく禁じていたのであり、そのことを「人にだにいかで知らせじとはぐくみ過ぐせど」（同⑤一五八）と、直接薫にも語っている。にもかかわらず、今までの姿勢とは裏腹に、八の宮が薫の前でだけは姫君たちに弾琴を勧めていることに注意したい。前述したように、宮は薫を婿にしたいと思っているものの、「さしも思ひよるまじかめり」（椎本⑤一七二）と、彼の深い道心ゆえに結婚は不可能であると考えていたこともあり、ここで示される宮の行為は、それでも薫のことを諦め切れず、結婚の許可の意を示そうとするものであると解されよう。[7] そして薫も、八の宮が結婚を許していると受け止めていることが、琴の演奏の場面を介して「さばかり、御心もて、ゆるいたまふこと」（同⑤一八三）と明記されている。これら楽器の演奏の場を通して、八の宮と薫による結婚の許可とその承認が具体的に語られているのであるが、[8] しかし、薫の心理的な変化（「宿世ことにて、外ざまにもなりたまはむは、さすがに口惜しかるべう領じたる心地しけり」（同））は、

二度目の演奏の直後、つまり、八の宮と薫の実質的な別れの場面と入れ替わる形ではじめて叙されており、この二人が対面している間は互いの話し合いによる結婚の成立が不可能であったことが明らかにされるのである。

このように宮の退場によって物語が薫と大君の恋へと大きく動き始めると、薫の道心を深めさせ、八の宮との「法の友」の関係を維持させていた出生の問題は、もはやその役割を失ってしまう。それゆえに、以下の物語において薫の出生の秘密は言及されておらず、「法の友」の関係によって性格付けられた八の宮の委託は通用しなくなり、その後見の依頼が薫の大君への接近の口実になってゆくことが語られているのである。

二

第三部の発端の構造として薫・匂宮と二人姉妹による平行四辺形的な構図[9]が指摘されているなか、この恋物語の始発においては八の宮の存在が加わることで、より複雑な人間関係の様相が繰り広げられることになる。この物語を考える際に、まずその全体像を把握すべく、八の宮と匂宮の関係が、他の人間関係をどのように制約してゆくかという側面に焦点を当てて分析を行うことにする。

薫を通して姫君たちの存在を知った匂宮が宇治にはじめて足を運んだのは、二月二十日ごろで、初瀬詣での帰途に中宿りをするためであった。姫君たちに興味を持っていた匂宮は、八の宮の手紙に自ら返事を出し、八の宮の方では中の君がそれに応えている。匂宮の手紙の内容は、「山桜にほふあたりにたづねきておなじかざしを折りてけるかな」（椎本⑤一七四～五）と、姫君たちへの懸想を明らかにするものではなく、同じ皇族であることを強調するものであった。帰京後、自分の真情を告白し得なかったこともあり、匂宮は宇治に手紙を遣し続けているが、それに対する八の宮の対応がとりわけ目を引く。

（二）もの騒がしくて、思ふままにもえ言ひやらずなりにしを、飽かず宮は思して、しるべなくても御文は常にありけり。宮も、「なほ聞こえたまへ。わざと懸想だちてももてなさじ。なかなか心ときめきにもなりぬべし。いとすきたまへる親王なれば、かかる人なむと聞きたまふが、なほもあらぬすさびなめり」とそそのかしたまふ時々、中の君ぞ聞こえたまふ。姫君は、かやうのこと戯れにももて離れたまへる御心深さなり。

（同⑤一七六）

匂宮の女性遍歴について言及している八の宮は、彼の手

紙に返事しなければ、かえって男の心を焦らすことになるとし、それに応えるように中の君をそそのかしている。例えば、玉鬘が蛍宮などからもらった懸想文に返事をしようとしないことについて光源氏が、「この君たちのすきたまはむは、見どころありなむかし。もて離れてな聞こえたまひそ。御返り時々聞こえたまへ」（蛍③一九六～七）と話している部分や、夕霧と落葉の宮が実事のない一夜を過ごした後、彼から届いた手紙を目にした一条御息所が夕霧に落葉の宮が疎遠にされる危機感から、「いでその御文、なほ聞こえたまへ。……心うつくしきやうに聞こえ通ひたまひて、なほありしままならむこそよからめ。あいなきあまえたるさまなるべし」（夕霧④四二四）と、返事を書かせようとする箇所などが示唆しているように、八の宮の行為は男女関係におけるやりとりを成り立たせている点において極めて重要である。この直前の匂宮の宇治訪問の時、対岸から聞こえてくる管絃の遊びの音に、八の宮は親王であった自分の過去を思い起こし、世俗の記憶から娘たちの将来を危惧し、結婚を検討している（「姫君たちの御ありさまあたらしく、かかる山ふところにひきこめてはやまずもがなと思しつづけらる」（椎本⑤一七一））。しかも、この本文（二）の出来事の後、娘たちの結婚に対する未練が一層募ってゆく八の宮は、今の状況で唯一人頼ることのできる薫に三度目の委託を残している。このような物語の展開を考えれば、この時八の宮は都人に立ち戻り、風流を解する心から、皇族としての匂宮の色好みを容認したうえで、中の君に返答を書かせていると解してよい。その結果、匂宮と中の君は手紙を媒介に関わることになりつつも、決定的な結び付きからはずれてしまっているのである。

では、物語はこのように曖昧な状態である匂宮と中の君の関係を、以降の展開において如何に用いてゆくのか。薫によって匂宮の愛情が真実なものであり、「おほどけたる人」こそかえって「心長き例」になると力説され、中の君との結婚が勧誘されるのは、八の宮の没後のことであった（椎本⑤二〇七）。この薫のことばは、匂宮と中の君の仲を取り持つという意向の表明だけではなく、薫の大君への思いを告白する手段になっている。そこで薫は、匂宮が心を寄せている人は中の君のようであるが、それも傍から見てはわからないと述べ、「御返りなどは、いづ方にかは聞こえたまふ」と、大君に質問を投げ掛けている（同⑤二〇九）。これまで中の君が匂宮に返事を送っていたのは事実であるが、それが父親の庇護のもとで交わされていただけに、儀礼的な内容であったに違いない。八の宮の死後、父親を亡くし

た悲しみから、匂宮の手紙に応えようとしない中の君の代わりに、最初に返事を出したのはほかならぬ大君であった。その返答を受け取った匂宮は、次のような反応を見せている。

さきざき御覧ぜしにはあらぬ手の、いますこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむとうちも置かず御覧じつつ、とみにも大殿籠らねば、「待つとて起きおはしまし、また御覧ずるほどの久しきは、いかばかり御心にしむことならん」と、御前なる人々ささめききこえて、憎みきこゆ。ねぶたければなめり。

まだ朝霧深きあしたに、急ぎ起きて奉りたまふ。

朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやはあはれとも聞く　（同⑤一九五）

大君と匂宮のやり取りは、親の不在ゆえに「思はずなることの紛れつゆにてもあらば、うしろめたげにのみ思しおくめりし亡き御魂にさへ瑕やつけたてまつらん」（同）という状況になりかねないと思う大君の判断により一回限りで終わってしまうのだが、匂宮は今までのものとは趣の異なる大君の文に興味を示し、傍線部のように、至急宇治に和歌を送っている。結局、物語はこの段階において匂宮が姫君たちの中でどちらに懸想しているかを明示していない。薫の質問は、控え目である大君の人柄を知っているために、彼女が返事を書くはずがないと見抜いたうえで行われたものであると考えられ、そこから、匂宮と中の君の関係を確定することで、大君と自分の関係の発展を試みようとする薫の思惑が窺えるのである。このように匂宮の恋の相手は薫によって定まり、これを機に匂宮の中の君に対する愛情の告白が具体的に描かれてゆくのであるが[10]、それと同時に匂宮と中の君の結婚を推し進めようとする薫と、それに躊躇する大君との間に葛藤が生まれてくることを見逃してはならない。

八の宮の没後、最初のうちは「つきなき身のありさまどもなれば、何か、ただかかる山伏だちて過ぐしてむと思す」（椎本⑤一九六）と、姉妹ともに結婚するまいと思っていた大君が、中の君にだけは世間一般の暮らしをさせたいと思い始めたのは、物語の進行を辿ってみれば、薫の大君に対する恋情の訴えの開始と重なっている。そして、その考えは薫と実事のない一夜を過ごし、彼の理想性を確認することで、中の君と薫の結婚へと固まってゆく。ところが、こうした大君の願望も虚しく、薫の手引きによって中の君は匂宮と結ばれてしまう。椎本巻の時点で大君は、「世にいと

いたうすきたまへる御名のひろごりて、好ましく艶に思さるべかめる」と、匂宮の接近を色好みゆえであると解しているものの、「かういと埋もれたる葎の下よりさし出でたらむ手つきも、いかにうひうひしく、古めきたらむ」とあるように、その求愛を決して不快に思ってはいなかった（同⑤二〇二～三）。しかし、中の君の結婚と同時に、「おほかたにつけて見たまひしはをかしうおぼえしを、うしろめたうもの思はしくて」（総角⑤二七〇）と、大君は匂宮への不信感を募らせており、この心情は匂宮の途絶えが続き、しかも宇治を訪問しておきながら、中の君のもとを余所にそのまま帰京してしまう彼の一連の行動によって立証される形になってしまう。そこで大君が、「これこそは、かへすがへす、さる心して世を過ぐせとのたまひおきしは、かかることもやあらむの諌めなりけり」（同⑤三〇〇）と、八の宮の遺戒を想起するとともに、「あだめきたまへるやうに、故宮も聞き伝へたまひて、かやうにけ近きほどまでは思しよらざりしものを」（同⑤二九八）と、父親が匂宮と中の君の結婚を許可しなかった理由が、匂宮の色好みな性格ゆえであったと考え始めていることに留意したい。このように違う事柄であった八の宮の「いとすきたまへる親王」（前掲本文（二）の傍線部）という匂宮に対する評価とその遺言が、大君によって一元化され、父親の意志に背いたという罪悪感から彼女は打ちのめされる。しかし、こうした大君の考えは、前述したように、八の宮が匂宮の色好みを容認していた事実とは明らかに異なっている。さらに、看過してはならないのは、大君が八の宮の遺戒を顧みれば顧みるほど、かえって物語は匂宮の中の君に対する愛情の深さを強調していることである。これによって中の君と匂宮の結び付きが、「おぼろけのよすが」であれば、結婚を許すという意味を孕んでいる遺言（「おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」（前掲本文（一）の傍線部②）に離反するものではないことが照らし出される。と同時に、父の諌めを裏切ったと信じ込んでいる大君の思惟が、彼女自身を苦しめる要因であることが浮き彫りにされるのである。

かくのごとく、八の宮の匂宮に対する評や軽率な結婚を厳重注意する遺戒が、中の君の結婚を通して確証されていると受け止めている大君は、匂宮への不信を薫にまで拡大させ、彼の求婚を拒み続けている。これら八の宮と匂宮、そして中の君との関係は、薫と大君の懸隔を紡ぎ出すために定位されたものであり、それにこそ物語の細心の注意が払われていると指摘されよう。すなわち、このように複雑

に入り組んだ人間関係は、薫の心変わりを恐れている大君にその恐れを深めさせ、死に赴かせるために組み立てられたものであると理解されるのである。

三

八の宮の死を契機に物語は、薫と大君が恋に思い悩む様子を表面化してゆく。しかし、この恋は成就されず、その理由を薫と大君の同型性に求める説[11]がある。この二人の共通性として、結婚の当事者であることの回避、厭世観などが挙げられているが、この点についてはさらに考えるべき問題があるように思う。本節では、薫と大君の人物造型に関する先行研究を踏まえながら、この物語の展開を考察するうえで、極めて重要な要素である二人の同型性について考えることにしたい。

まず、薫の恋と仏道に対する基本的な姿勢は、匂兵部卿巻において確かめられる。

中将は、世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはんはつつましくなど思ひ棄てたまふ。さしあたりて、心にしむべきことのなきほど、さかしだつにやありけむ。人のゆるしなからんことなどは、まして思ひよるべくもあらず。（匂兵部卿⑤二九）

一読して明らかなように、「世の中」を味気ないものと悟り澄ましている薫は、女性に執心を抱くことになると、俗世から離れにくくなると思い、「わづらはしき思ひあらむあたり」との結婚を拒んでいる。ここで注意したいのは傍線部の叙述で、そこには厭世観ゆえに恋を避けようとする薫の気持が示されている。この本文の前には、「かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすぼほれてや」（同⑤二四）と、未だに宙に迷っている柏木のあり方に苦しむ薫の心内が述べられ、恋のイメージが亡き柏木のそれと結び付いていることが明かされている。早くから「何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん」（同⑤二三）と、自分の出生に秘密があることを感じていた薫であるだけに、己れの不安定な境涯の自覚が厭世観へと繋がってゆくのであるが、それを意識すればするほど、「安からぬ思ひ」を増殖させる恋が恐くなってしまうのは、必然的な帰結であるといえよう。[12]

一方、物語において独身を貫き通そうとする大君の姿勢が語られるのは、御簾の内に押し入った薫と結ばれずに一夜を過ごした翌日のことであった。

（三）この人の御けはひありさまの疎ましくはあるまじく、故宮も、さやうなる心ばへあらばと、をりをりのたまひ思すめりしかど、①みづからはなほかくて過ぐしてむ、②我よりはさま容貌も盛りにあたらしげなる中の宮を、人並々に見なしたらむこそうれしからめ、③人の上になしては、心のいたらむ限り思ひ後見てむ、みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ、（a）この人の御さまの、なのめにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、（b）恥づかしげに見えにくき気色も、なかなかいみじくつつましきに、わが世はかくて過ぐしはててむ、と思ひつづけて、音泣きがちに明かしたまへるに　（総角⑤二四〇～一）

大君は自分が結婚すれば、中の君の面倒を見る人がいなくなるために、自らは後見役を務めて妹を薫と結婚させようとしている（傍線部③）。このように大君が後見の不在を理由に自分は結婚できないと考えていることは、「いかにもてなすべき身にかは、一ところおはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれたてまつりて、宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば、みな例のことにてこそは、人笑へなる咎をも隠すなれ」（同⑤二四六）と、両親のうちどちらか一人でも存命であれば、「さるべき人」に世話してもらって結婚したであろうとするところからも看取される。この「いかにもてなすべき身にかは……」で始まる叙述は、朱雀院が出家を決め、女三宮の処遇に苦心する条「ほどほどにつけて、宿世などいふなることは知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなん。すべてあしくもよくも、さるべき人の心にゆるしおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず」（若菜上④三三）と似通っており[13]、両者からは親の承認さえあれば、結婚の幸・不幸は宿世に左右されるものだから　本人の過ちとして世の非難を受けることはないとする共通の認識が読み取れる。但し、これらの考えは宮家の矜持に関わる問題であって、親の許しのない本人同士の意志による結婚が全く不可能であることを示しているわけではない。大君が「この人の御さまの、なのめにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを」（点線部（a））と薫の立派さを思い、求婚を受け入れ得ないとするのは、その婚姻が進められる余地があることを反対に照らし出している。しかし、薫の素晴らしさゆえに、没落したとはいえ、宮家の一員として「さるべき人」の正式な許可による

結婚が絶対的に望まれるわけである。そこで、右の行文において大君像の特質を表すものとして注目したいのは、彼女が結婚を諦めようとする際に、その最悪の結果を想定していることである。もとより後見の不在である女性の結婚は、男の愛情にだけ期待を寄せるほかなく、その意味で結婚の破綻というのは、男の心の移り変わりと不可分の関係にある。この大君の悲観的な思考は、男性の愛情だけで結婚生活が続けられるという幸運が信じられないこと、つまり、己れの運命を過酷なものとして捉えていることを示している。こうした大君の自己認識は、中の君との対比を通しても露呈され、「同じ心に何ごとも語らひきこえたまふ中の宮は、かかる筋にはいますこし心も得ずおほどかにて、何とも聞き入れたまはねば、あやしくもありける身かな」（総角⑤二四七）と、すべてを一身に背負わなければならない自分の立場を慨嘆している。

かかる大君の特徴は、その登場当初から用意されていたと言っても過言ではない。橋姫巻の八の宮と中の君との唱和の場面で大君は、「いかでかく巣立ちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る」と、「水鳥」の浮いている姿を自己の「浮き身」に見立て、己れの「ちぎり」が思い知られると詠歌している（橋姫⑤一二三）。家の落魄によって宇治に移ってきた姫君たちに、世俗と関わる唯一の選択肢は男性の求愛による結婚しかないのであるが、このように早くから自分の不遇に敏感であった大君が、「みづからはなほかくて過ぐしてむ」（傍線部①）と宇治での生を固執するのは結婚、というより、それに繋がる恋に恐怖を感じていることを明かしている。とすれば、以上で見てきたように、薫と大君は同じく恋に対して恐れを抱いていることがわかる。そして、この二人の特徴である男女の愛情に対する無常感は、こうした恋への不安と表裏一体のものであることが浮き彫りにされる。

四

前節で述べてきたように、薫と大君が恋を恐れていることは、この二人を「いかにして結びつけずに物語が展開してゆくか」[14]という物語の方法の問題と密接に関わっている。

総角巻において薫と大君の関係に大きな転換をもたらしたのは、薫が自分の愛の深さを大君に訴え、御簾のうちに押し入った事件である。しかし、そこで薫は場所が仏前であり、喪中でもあることから、大君の傍らに「かりそめに添ひ臥し」、彼女と「常なき世の御物語」を交わしている（総角⑤二三六～七）。そして、その明け方に二人は、次のよ

うな贈答歌を詠んでいる。

鶏も、いづ方にかあらむ、ほのかに音なふに、京思ひ出でらる。

山里のあはれ知らるる声々にとりあつめたる朝ぼらけかな

女君、

鳥の音もきこえぬ山と思ひしを世のうきことは尋ね来にけり　（同⑤二三九）

鶏の鳴き声に京を思い出した薫は、山里の風情を感じさせる様々な音に、実事のなかったことの無念さと執着を和歌で表現している。それとは対照的に大君は、宇治を「鳥の音もきこえぬ」奥山と捉え、そこまでつらいことが追いかけてきたと、折からの情趣を排除した趣の和歌を詠じている。この返歌からは、『岷江入楚』（三光院実枝説）が「世のうき事は今夜の薫の事をいへり」と指摘しているように、「世」（都）から宇治への闖入者[15]としての薫のイメージが浮上してくる。このように一夜を境に、大君が薫の都人としての側面を強く意識し始めることに注目したい。この直前には、自然の風景を媒介にようやく心打ち解けて「すこしゐざり出でたまへる」大君が薫と無常感を深め合い、互いに心を通い合わせている場面が据えられている（同⑤二三七～八）。このように薫と心を交わした後、その関係を「うきこと」と詠歌しているのは、かえって大君にとって薫の存在が大きくなってきたことを逆説的に物語っていよう。つまり、薫の求愛に大君が絶望を感じているのは、薫との関係を男女関係として見据えたうえで、宇治に引き籠もっている自分と都人である薫との境遇の相違を自覚していることを意味しているにほかなるまい。薫の帰京後、大君の心中思惟には、薫に心惹かれながらも、「恥づかしげに見えにくき気色も、なかなかいみじくつつましきに」（前掲本文（三）の点線部（b））と、彼の容姿の素晴らしさゆえに、「我よりはさま容貌も盛りにあたらしげなる中の宮を」（前掲本文（三）の傍線部②）と、自分の容色の衰えを意識していることが述べられている。後見のいない身であるがゆえに抱かざるを得ない薫との結婚に対する不安が、この容色の意識によって尖鋭化されているのであるが[16]、これらの感慨は和歌で表現されている大君の心情をより具体的に提示しているといえよう。とすれば、大君の現実認識は、皮肉にもこの二人が心情的に最も近付いた瞬間になされていることが見て取れ、彼女の結婚拒否の思いもこの時点において定まったことが見出される[17]。この薫と大君の和歌は、形式としては贈答歌であるに違いないが、各々の感慨を封じ込め

た独詠歌としての性格を帯びており、[18] 仏の御燈明の前での一夜を介して、薫と大君の思惟がそれぞれ決定付けられ、二人の連帯は保たれていながらも、心は別の方向へ傾いてゆくことを形象化していると考えられる。

ところが、注意すべきは、物語は単に大君の現実認識と、それによる結婚の拒否を語ろうとしているのではないということである。もとより大君が男女関係のはかなさを熟知している人物であることは、男女関係を左右する容色の美や経済力、後見の存在の有無など、世俗における諸条件に最も敏感にならざるを得ないことを示している。しかしながら、そうであればこそ、逆に現世の論理に縛られない精神的な繋がりを相手に求めるという必然性が付与されるのである。言い換えれば、大君の結婚拒否は、薫と結ばれたくても、決して満足し得ない自分の状況に鋭敏であるがゆえに、世俗の諸価値を超越する愛を求める哀切な気持から生まれたのである。このような大君のあり方は、八の宮の喪が明けて来訪した薫が「かりそめに添ひ臥し」た時のような親密さを求めて、「例のやうに聞こえむ」（総角⑤二四三）と語っているのに対し、彼との対面を頑なに拒む姿勢によって明確になってくる。薫の要請を受けた大君は、「げに、何の障りどころかはあらむ、ほどもなくて、かかる御住まひのかひなき、山なしの花ぞのがれむ方なかりける」（同⑤二四七）と、どこにも身を隠し得ないと追い詰められた心情を述べている。傍線部の「山なしの花」は、「よのなかをうしといひてもいづこにか身をばかくさん山なしの花」（古今六帖・四二六八）を引いた語で、薫との直接対面の際、大君によって「鳥の音も……」といった歌が詠まれたうえに、再び同じ場が設けられるようになると、一層孤立した心境を語る表現が導き出されるのは当然であるともいえる。がしかし、重要なのは、そこから浮かび上がってくる大君のイメージが孤絶した山籠りの姿[19]であるということである。大君にとっての至福の時間は、何の制約も感じずに薫と過ごした一時であったにほかならないが、その出来事が大君に自分の位置を痛感させた以上、薫がいくらあなたの心の「ゆるし」なしには乱暴なことはしないと訴えても、二度とそのような時間が訪れないのは自明である。大君が薫を拒む真の理由は、互いの感情がその一夜に固定されたままでありたいという切実な思いにあり、物語における孤立した大君の山籠りの姿は、こうした大君の内面世界の深化を照らし出しているのではあるまいか。

それに対して大君から存在の不安という自分との共通点を見出した薫にとって、「何とはなくて、ただかやうに月を

も花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」（総角⑤二三七～八）とあるように、季節の風物に対する感動を共有し、語り合うのが恋であるとすれば、これは彼の志向する仏道と必ずしも矛盾しない。その観点から見れば、むしろこの恋の成就は道心に連なるはずだが、しかし問題は、この恋が俗世と全く断絶した形で進行してゆくことはあり得ないということである。物語が薫を宇治と京を往来する「俗聖」として造型していることで、俗世の観念が排除されることは難しく、それは大君を薫と結婚させようとする女房たちの思惑によって裏打ちされている。のみならず、薫の大君に対する物言いは真実であるものの、彼自身、いつか大君を京に迎えたいと望んでいる。大君が薫の要求に応じない理由は、前述したように、まさにこの点にこそ存在しているのである。だが、昔から独身を考えていたと語る大君のことばを、仲介役の女房弁が、「思しおきつるやうに行ひの本意」を成し遂げようとすると勝手に解釈し伝えたこともあり、薫は「いかなれば、いとかくしも世を思ひ離れたまふらむ、聖だちたまへりしあたりにて、常なきものに思ひ知りたまへるにやと思すに、いとどわが心通ひておぼゆれば」と、彼女が道心を深めていると思い込み、心の通い合いを要求し続けている（同⑤二五〇～一）。そのことで大君に結婚の「ゆるし」が得られるとばかり思い、匂宮を中の君に案内し、大君の憤りにあった時でさえ薫は、「かばかりの御けはひを慰めにて明かしはべらむ。ゆめゆめ」（同⑤二六七）と嘆いているのであった。

このように見てくると、この恋物語の舞台である宇治は、薫と大君が実在している場所でありながら、互いにとって相手が不在である空間ともいえよう。「俗聖」という両面を併せ持っている薫は、世俗では得られない仏道を求めて宇治を訪ねてくるのであるが、大君にとって薫の都人としての印象はむしろ増大され、彼との距離を実感させられる。また、宇治を離れてどこにも逃げることのできない大君は、閉塞的な内面の世界を作り上げ、死へと傾斜してゆくしかないのであるが、薫にはその生き方が理解できず、彼女から仏教的なイメージだけを見出している。両者にとって宇治は、二人が繋がることのできる唯一の場所であるものの、決して安住の地にはなり得なかった。そうした意味で、薫と大君の心象によって生み出されたそれぞれの空間は、そのまま宇治と京の距離によって象られているように思われる。

＊

大君が死に至るまでの経過を語る後半部の特徴として、大君の薫に対する不信の増殖と、彼女の容色の衰えの意識が挙げられる。薫に対する大君の不信が決定的になったのは、中の君を窮地に追い遣った匂宮への大君の感情が薫にまで向けられた時であった。

我も、世にながらへば、かうやうなること見つべきにこそはあめれ、中納言の、とざまかうざまに言ひ歩きたまふも、人の心を見むとなりけり、心ひとつにもて離れて思ふとも、こしらへやる限りこそあれ

（総角⑤三〇〇）

この一節については、大君の男性に対する不信感が指摘されているが、しかし、匂宮と薫に対する大君の感情は同質ではない。前者の場合、匂宮の不実さに大君が絶望しているとすれば、後者の薫に対しては、「心ばへののどかにもの深くものしたまふを、げに人はかくはおはせざりけりと見あはせたまふに、ありがたしと思ひ知らる」（同⑤二八七）と、おおらかで思慮深い人物であると感心している。大君の薫への不信の深化は、恋心の表出を抑制している心理の延長上にあるものとして把握すべきであり、それは前掲本文（三）に綴られていた容色の意識をはじめ、死に際まで「顔はいとよく隠したまへり」（同⑤三二五）と、袖で己れの顔を必死に隠そうとする行為と連なっているように思われる。物語には大君の一貫した容色の衰えの意識とは対照的に、「すこしうきさまをだに見せたまはばなむ、思ひさますふしにもせむ、とまもれど、いよいよあはれげにあたらしく、をかしき御ありさまのみ見ゆ」（同⑤三二六）と、彼女の容貌の美しさを深く心に刻み込む薫の姿が記され、彼女の思考が思い込みであることを明かしている。しかし、大君はそのような薫の心に気付くことができず、その恋が大切であるがゆえに、彼とは釣り合わない自分の境遇の意識から自由にはなり得ない。このような内面が、まさに顔を隠す行動で表面化されていると考えられるのである。大君は薫に我が顔を見られてしまったら、彼の心が変わるまいかという男の愛情に対する疑心にとらわれている。それゆえに薫の愛情がいくら明確で、確実なものであるにせよ、それが大君を安心させることは決してない。薫を避け続けることこそ、二人の理想的な関係を築き上げることであり、死は、大君にとって愛の成就を意味しているに違いない。

このように大君は相手と距離を置き、回避するしかなく、これこそが、彼女にとっての情愛の表出であり、唯一の愛し方であったにほかなるまい。この恋物語は結婚の不成立と、それによってのみ獲得される愛という二つの問題の緊

密な調和によって織り成されている。それは現実における恋と結婚の両立の難しさ、すなわち、相手に対する思いが強ければ強いほど、その結び付きが困難であることを浮き彫りにしている。だからこそ、大君と薫は純粋な恋を具現しているのであるが、しかしそれゆえに、現実において互いの心を充分通い合わせることができず、大君の死という悲劇的な結末に向かうのである。

【注】

(1) 長谷川政春「宇治十帖の世界―八宮の遺言の呪縛性―」(『国学院雑誌』一九七〇年十月)、千原美沙子「大君・中の君」(『源氏物語講座』四、有精堂、一九七一年)、高橋亨「大君の結婚拒否」(『講座源氏物語の世界』八、有斐閣、一九八三年)、今井久代「宇治八の宮の遺戒と俗性」(『中古文学』一九九七年十一月)等参照。

(2) この他に、藤壺が斎宮の女御を東宮の後見にする意思を漏らしたことを理由に、源氏が斎宮の女御を立后させるところ「斎宮の女御をこそは、母宮も御後見と譲りきこえたまひしかばと、大臣もことつけたまふ」(少女③三〇)や、朱雀院が源氏に女三宮を託す箇所「かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王ひとり、とりわきてはぐくみ思して、さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへと聞こえまほしきを」(若菜上④四九)などにも見出される。

(3) 八の宮の薫への後見依頼に関する現行の理解には、八の宮による結婚の暗示を読み取るものや、その遺戒の曖昧さから必ずしも結婚を意味してはいないとするものがある。

(4) 秋山虔「八の宮と薫君―宇治十帖の世界、その一―」(『日本文学』一九五六年九月)

(5) 原岡文子「宇治の阿闍梨と八の宮―道心の糸―」(『源氏物語の人物と表現』翰林書房、二〇〇三年)

(6) これは、柏木が夕霧に残した遺言(「誰にも、この宮の御事を聞こえつけたまふ。……事にふれてとぶらひきこえたまへ」(柏木④三一一～八))とも共通するところがある。

(7) これら弾琴の場面に関する分析には、小町谷照彦「大君物語の始発―「橋姫」「椎本」の展開」(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版社、一九八四年)や、西耕生「「ものの音めづる心」―大君をとりまく人びと―」(『中古文学』一九九一年五月)などがある。但し、後者は「姫君に琵琶、若君に箏の御琴を」(橋姫⑤一二四)と、八の宮が箏の琴を中の君に教えていたことを根拠に、妹の方に弾琴を促していると説いている。しかし物語は、「このわたりに、おぼえなくて、

をりをりほのめく箏の琴の音こそ、心得たるにやと聞くをりはべれど、心とどめてなどもあらで、久しうなりにけりや。心にまかせて、おのおの掻き鳴らすべかめるは、川波ばかりや打ち合はすらん」（橋姫⑤一五八）とあるように、八の宮が姫君たちのどちらに演奏を催促しているかを語っていない。それゆえに、後に大君が中の君を薫に譲ろうとする展開が可能になってくると考えられる。

（8）この琴の演奏の場面における八の宮の結婚の許しが、その成立へと繋がってはいないものの、薫の出生の秘密の問題とともに、彼の心理的な変化（大君への思い）を導いていることに注意したい。

（9）三田村雅子「源氏物語第三部発端部の構造」（『日本文学』一九七五年十月）

（10）このような展開が可能なのは、八の宮が薫に姫君たちを託したことと深く関わっている。というのも、匂宮と中の君の結婚のためには、後見の薫の認知が必要だからである。

（11）鷲山茂雄「宇治十帖主題論」（『源氏物語主題論』塙書房、一九八五年）、大朝雄二「源氏物語・宇治の女はらから論（上）」（『文学』一九八六年三月）等。

（12）池田和臣「薫の人物造型」（『源氏物語の探究』第十五輯、風間書房、一九九〇年）

（13）注一一の大朝雄二の論。

（14）高田祐彦「「山姫」としての大君」（『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三年）

（15）小町谷「風景の解読―「総角」の表現構造」（注七所掲）

（16）藤原克己「紫式部と漢文学―宇治の大君と〈婦人苦〉―」（神戸大学文学部国語国文学会『国文論叢』一九九〇年三月）

（17）吉岡廣「「薫論」補遺」（『源氏物語論』笠間書院、一九七二年）は、一夜において薫が兄弟のような関係を求めたことに大君が傷つき、それによって結婚拒否を決心することになったと指摘している。

（18）注一五に同じ。

（19）注一四に同じ。

＊源氏物語の本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、巻名、巻数及び頁数を示した。和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）による。